2026年10月25日（日）主日朝礼拝説教

『聖霊を冒涜する者』　井上隆晶牧師
ヘブライ人への手紙6章4～8節、ルカによる福音書12章4～12節

❶【神から離れることを恐れるべき】

「友人であるあなたがたに言っておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方だ。そうだ。言っておくが、この方を恐れなさい。」（ルカ12：4～5）たぶんこの話は迫害を前提にして言われたものだと思います。祭司長、長老、律法学者というユダヤ教当局は、イエス様とその弟子たちをユダヤ教の分派、国家の秩序を乱す者として迫害しました。しかしイエス様は迫害する者を恐れず、神を恐れるように言われます。
死を恐れないためには、聖書が語る死の本質を知っておかなければなりません。死には二種類あります。人間が肉体と魂の合成物である以上、死も「肉体の死」と「魂の死」の二つがあります。このうち最も恐ろしいのは魂の死です。魂の死はその人の本体の死ですが、肉体の死は魂を入れる器が壊れることです。魂は神から離れることによって一瞬で死にましたが、肉体の死はその後だいぶ時間を経てから現れました。**「アダムは930年生き、そして死んだ。」**（創世記5：5）この930年の間、アダムは自分が死んでいることに気づいたのでしょうか？この世の人は肉体の死を一番恐れ、この肉体を何とか生き永らえさせようと努力をします。しかし魂が死んでいることに気がついていません。そして誰も魂を生かす努力をしないのです。**神のことを思わないで平気で生きて行けるようにしたのが悪魔です。この悪魔に騙され、自分が死んでいることに気がつかないことが本当の死です。**

●4世紀のコンスタンチノープルのヨハンネス・クリュソストモスは62歳で生涯を閉じようとした時、**「人は自分で自分を破壊するのでなければ、誰も破壊することはできない。」**といいました。

人は人を殺すことはできません。**人は神の創造物を壊しても殺すことは決してできないと、教父たちは口を揃えて言っています。なぜなら神の言葉は永遠に残るからです。人を殺すことが出来るのは「その人の罪」だけです。人は自分の罪によって死ぬのであって、他人は殺すことはできないのです。神キリストが「命の木」なのですから、この神キリストという木から離れることを一番恐れなければなりません。それが罪の根だからです。このキリストという木につながってさえいれば私たちの肉体が壊されても、中身は死んでいないのです。**時が来たら復活して永遠に生きることができるのです。しかし迫害を恐れ、また悪魔の嘘に騙されてこの世の中に命があると思い、世に心が向くようになると、**その人の魂は麻**

痺してきて、やがて教会に行かなくても平気になり、キリストから離れることが怖くなくなり、本当に魂が死んでしまうのです。このような死こそ一番恐れなければならないのです。

「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」（ルカ 12：7）神は私たちの髪の毛一本まで数えておられるほどに、この私のことを永遠に覚えていて下さるというのです。私の肉体が朽ちても、私のことを覚えておられて必ず復活させて下さるでしょう。だから肉体の死を恐れず、キリストから離れることを一番恐れなければなりません。

❷【イエスの仲間であることを誇ろう】

次に、人々の前で「自分はイエス様の仲間だ」という者は、イエス様も神の国の天使たちや聖徒たちの前で、「この人は私の仲間だ」と言ってくださるというのです。初代教会では公に「イエスは主である」と告白するということは命に関わることでした。キリスト教信者であると分れば捕らえられ、牢に入れられ、財産は没収され、円形闘技場に引き出され、獣と戦わされるか、十字架刑で殺されました。**殉教してでも「キリストを主」と告白するためには、よほどキリストを誇りとし、最も確かな方、真理であり、永遠の命のお方、天国の王、神ご自身であると信じていなければ出来ないことです。人間は価値あるものの為なら死ねますが、くだらんものの為には命を懸けられないからです。**ですから教会は最低三年間は洗礼は授けませんでした。生半可な気持ちで信者になり、迫害を恐れて仲間の居場所を密告すれば、みんな捕まり殺されるからです。礼拝も一部が求道者のためのみ言葉の礼拝、二部が信者のための聖餐礼拝であって、二部の聖餐の前には求道者は出て行かされました。聖餐を誤解して、キリスト教徒は子供の肉を食べていると噂されたからです。**聖餐は本当にキリストを「主」と信じる信者だけのものであって、主の祈りもここで教えられ、唱えられたのです。**

キリストを拒否し「自分はイエス様の仲間ではない」と言えば、天国に入れてもらえないのです。ペトロは「あなたのことを知らない」と大祭司の庭で三回言いましたが、それは彼が聖霊を受ける前だったので赦されたのです。ですからここでも「**人の子の悪口を言う者は皆赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は赦されない。**」（12：10）と言われているのです。聖霊が降って初めて、イエス様のことが分かるのであって、それまでは確信も勇気もないからです。事実、聖霊を受けた弟子たちは別人のようになってキリストを証し、不思議な業としるしを行い、ペトロも殉教していきました。「**会堂や役人、権力者の所に連れて行かれたときは、何をどう言い訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは聖霊がそのときに教えてくださる。**」（12：11～12）とあるように、聖霊は弟子たちに語るべき言葉を与えたのです。

●昨日 TV で「プラチナファミリー」という番組を見ました。甲賀市土山宿にあ

る土山家は代々「本陣」を営んできました。本陣とは大名や公家などの特別な人が泊まる宿のことです。勝海舟や徳川慶喜、さらに明治天皇も宿泊されました。宿帳にはその名前がびっしりと記載されており、指定文化財になっています。

有名な人が泊まった家は、それだけで尊敬を受けます。また有名人と出会ったら私たちは自慢するでしょう。私たちの中には偉大な神キリストが宿られているのです。どうしてキリストの住まいとなった自分を喜ばないのでしょう。私たちは自分が立派であることを誇るのではなく、「私は罪人です。しかしこんな罪深い私を主は選び、愛し、ご自分の体として下さり、ご自分を伝える器として用いて下さった」と主キリストを誇りましょう。

❸【聖霊を冒涜するとは】

「**聖霊を冒涜する者は赦されない。**」（ルカ 12：10）ということをもう少し詳しく学びましょう。冒涜とはどういう意味でしょう。辞書を調べると「神聖なものを犯し、汚すこと。大切にしているものの価値を傷つけること。敬意を払うべきものを著しく軽んじること。」と書いていました。聖霊の光に照らされ、癒され、救いの業を体験しながら、それを捨てて偶像に走り（背教）、キリストと聖霊の業を馬鹿にし、軽蔑する人は最後の救い主（最初の救い主はキリスト）を拒否したことになるのです。もうこれ以上、救い主は遣わされません。実に聖霊が真理を教え、神の命を与えるのですから、真理と命を拒否したことになるのです。その人は永遠に救われないでしょう。（ヘブライ 6：4～8）それだけではありません。**キリスト教徒であっても、聖霊の業を受け入れず、軽んじる者は罰を受けるでしょう。**

例えば聖書を軽々しく扱う人は、聖霊を冒涜する者です。「**聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。**」（Ⅱテモテ 3：16）とあるからです。聖書とは、聖霊と人間が共働して書いたものです。ですから神の言葉と人間の言葉の両方を含みます。神の性質と人間の性質の二つの性質を持つものが聖書です。地のものは変化しますが、天のものは永遠です。ですから聖書を単なる地上の書物だと思って研究し、読む人は聖霊を冒涜することになるでしょう。また信条を軽々しく扱う人は、聖霊を冒涜する者です。使徒たちはエルサレムに集まり、第一回公会議を開き、異邦人キリスト教徒も割礼を受けるべきかどうかを協議しました。その結果「**聖霊と私たちは、次の必要な事柄以外、一切あなたがたに重荷を負わせないことを決めました。**」（使徒 15：28）といって、割礼は不要であることが決議されたのです。それ以降、教会は七回の公会議を開き、キリストとは誰なのかを決議し、信条を作成しました。それは聖霊と教会が決めたことなのです。これを受け入れないことは聖霊の業を侮辱することになります。**神から出た「聖なる伝承」を持つものが教会なのです。私は自分の教えを語っているのではなく、私も受けたもの、それを皆さんに伝えて来たのです。**私は皆さんがそれを恐れをもって信じてほしいと願います。

聖書を軽んじ、教会の伝承を軽んじる牧師や教会は聖なる伝統からずれて行くので、必ず命を失い、消えて行くでしょう。キリスト教は単なる人間が創った宗教ではないのです。これは神から出たものですから、私たちを完全に救うことが出来るのです。どうか聖霊の業である聖書、信条、教会を信じて、豊かな実を結ぶものとなってほしいと願います。